

## シンポジウム

テーマ：すべてのひとが学び続けられる社会をつくるために  
社会教育ができること

シンポジスト：青木 信二氏（厚木市立森の里公民館 前地区長）  
阪本 陽子氏（東京都台東区教育委員会 社会教育主事）  
渡邊 健一氏（相模原市 社会教育委員）

コーディネーター：伊藤 真木子氏（青山学院大学 教授）



**伊藤** ▶ これからシンポジウムを始めます。シンポジウムのテーマは、「すべてのひとが学び続けられる社会をつくるために社会教育ができること」ですが、少し考えてみるだけでも難しいテーマと思います。「学ぼうとする人をサポートしよう」ということは当然考え得るべきことでしょうけども、「今は学びたくない」というような人について、どのように考えたらよいでしょうか。

学ぶ理由も、目的も、方法も、人それぞれであって良い訳です。私たちは地域づくりとか、地域社会や地域住民の観点から理想とされる学びを良しとして、それを推進していく議論をすることが大事で、そこに話をもっていきたいという面があります。でも考えてみれば、そういう理想とされる「学び」ばかりが「学び」ではない訳ですよ。 「すべてのひと」について考えるというのはとても難しいなと思います。

それから、テーマに「社会教育ができる

こと」とありますが、これは行政が担うものもあれば民間が担うものもあります。社会教育委員はそのパイプ役と言われたりします。

皆さんがどのあたりの話を期待しているのか、難しいなと思いますが、それでも今回のシンポジウム、画面に出しました4つの柱を設けて考えていくことができたらと4人で話してきました。

- 1) すべてのひとが学び続けられる社会とは
- 2) 学び続けることが難しい状況にある人々へのアプローチ
- 3) 難しい状況にある人々をとりまく周囲の人々へのアプローチ
- 4) 「すべてのひとが学び続けられる社会をつくる」のは誰か

この後1時間くらいで第3の柱まで話をして、その後は、会場の皆さんとのやりとりを行い、最後に登壇者の3名の方から締めのお話を伺いたいなと想定しています。

皆さんとともに良い時間を作っていきますように、改めてどうぞよろしく願いいたします。

早速ですが、登壇者の皆さんにお話を伺ってまいりたいと思います。

（柱の第1として）それぞれの方にとって現在の社会教育がどのように映っているか、社会教育とのこれまでの関わりも含めた自己紹介と併せて、お話を伺えたらと思います。

**青木** 青木と申します。神奈川県厚木市森の里という地域からまいりました。教育出身者ではありません。ただの地域のおじさんです。

30代後半から自治会をはじめ、39歳の時に2,000所帯ぐらいの自治会長を、その後、PTA会長や青少年健全育成会の会長等を務め、今から考えると30年以上、いろいろな地域活動を支えてきました。その縁から厚木市の社会教育委員をさせていただき、議長も務めました。社会教育を学びながら、地域活動だけではない魅力が地域活動にはあるということが、新しい視点だったように思います。

皆さん、地域活動と聞いたら、すぐにイベントと考えちゃうでしょう。1回終わったら「終わった、よかった」とみんなで酒飲んでバンバンバンで終わりだったのですよね。社会教育に携わると、そうではないことが分かりました。終わりが始まりなのです。このことが「次」を継続するにあたって、私にとって大きな力になりました。

いろいろな活動をしていくと、こうした社会教育活動のものが見方が身につけていき、それらを施策に活かしたいと思いました。社会教育委員会議の提言として「地域ぐるみ家庭教育支援事業」を教育委員会に提出しました。厚木市ではおそらく初めてのことでなかったかと思います。

本来は、事務局である社会教育担当課が施策を考えて、社会教育委員会議にかけて承認をとるのですが、私たち社会教育委員自身がいろいろな活動をして、それらを集約すれば、こんな施策ができるのではないかという提案をしたのですね。

厚木市社会教育委員会議の事業の中で、ずっと家庭教育支援を追っかけていました。それまでは、パンフレットを配ったり、

いろいろなことをやったりしていたのですが、家庭教育支援になっていないのではないかと思い、社会教育における家庭教育支援事業を施策として起こそうということで、この事業が生まれました。

一番大きなポイントは「協働」です。今では「協働」という言葉は皆さんに通じると思いますが、当時は全く通じませんでした。「地域のいろいろな団体にいろいろな補助金がおりにあります。それらをみんなが協力し合って、共に活動していきませんか。そして、孤立する家庭をなくそう、みんなで繋がりをもって地域づくりをしていこう」ということを考えた施策でした。

森の里地区がモデル地区に指名され、実行委員会を作っていました。この理念の基にどのような活動をすればよいかを地域の皆さんで話し合っ考えたのが、「緩やかな繋がり」です。

地域には、自治会、青少年健全育成連絡会、子ども会、PTA、学校、公民館などいろいろな団体がありますが、事業についてはそれぞれでやっています。そうではなく、真ん中には地域の子どもがいる、地域の家庭がいると考え、緩やかな繋がりをもっていろいろな活動に対してみんなが協力し合おう、共に地域づくりで活動していきませんかということを、地域に訴えました。

そうしたところ、まさにヒットしました。この事業が展開していくうちに、いろいろな地域の団体に、例えば、自治会だったら自治会だけが活動していたものが、子ども会やPTA、学校、そして青少年健全育成連絡会等と一緒に繋がっていき、広がっていきました。これが、今の森の里の地域づくりの基盤を作ったのではないかと考えています。後で、地域学校協働活動、学校運営協議会制度のお話をさせていた

できますが、その基盤づくりになったと思います。

このような緩やかな繋がりをもって、いろいろな活動をしていくうちに、繋がりのある豊かな地域づくりができるようになりました。それで生まれたのが、「共に楽しみ、共に学び、共に育つ・成長する」という理念です。この「共に」とは、子どもや大人、高齢者までいろいろな人たちが関わることによって、いろいろなところで学びに繋がっていくということをうたったテーマです。今でも森の里の理念となって、各種の事業に展開しています。

その後、社会教育委員を退任したところで、今度は、森の里公民館地区館長に指名されました。私自身が地域ぐるみの家庭教育支援事業を考えたのに、その最前線に立つことになって、これにはもうびっくりしまして、本当に大変なことだと思いつつ、楽しく活動させていただきました。今は3期・6年間の地区館長を無事に終えほっとしているところですが、未だに楽しく地域活動をしている青木でございます。

これから、すべてのひとが学ぶためにはどうすればいいか、そういう社会はどのようにつくるかというお話をしていくと思いますけども、私たちはそういう理念をしっかりと自分自身が地域において作り上げて、そして活動することが一番ではないかと考えております。



**阪本** 私は、東京の台東区教育委員会生涯学習課で社会教育主事をしております。台東区は、上野や浅草のある町で、ここからそんなに遠くないので、もしよろしければ、お帰りにぜひ寄っていただければと思います。

御参加の方で社会教育主事の方、ちょっと拍手をしていただけますか。(少し拍手が起こる) いました、嬉しいです。仲間です。

自己紹介ですが、大会冊子の14ページに私のことが書いてありますが、大学時代に地域の子どものリーダー育成事業でボランティア活動をしまして、育成スタッフをしたことがきっかけで、社会教育の道に縁ができました。大学卒業後は、一旦民間企業に就職をしましたが、ボランティアスタッフを継続する中で、改めて社会教育の世界に魅力を感じ、路線を変更して、現在は社会教育主事として仕事をしています。

台東区との縁は、社会教育委員を務めさせていただいたというのがきっかけです。その中で行政側として仕事をしてみないかとお声掛けをいただき、社会教育指導員になり、その後、社会教育主事の発令を受け、現在に至り、20年ほど社会教育主事をしております。歳がばれるかなと思いますが、こうした経緯です。

今の社会教育の現状をどう捉えているかということで、2点ほど気づきをお伝えさせていただくと、1つは、今拍手をしていただいたのですが、社会教育専門職が激減しているということです。東京23区の中では「社会教育主事はもう不在だよ」という自治体も出てきているぐらい、社会教育主事の減少というのが非常に大きく目立つかなと思います。

これは社会教育に対して1つの評価がくだされているような気がして、非常に

寂しく思っているのですけれども、どうやってこの社会教育専門職員を増やしていくか、皆様のような社会教育委員の方と一緒にまちづくりをしていく専門職を増やしていくかということが1つ課題だなと思っています。

もう1つは、学習者とか、学習を取り巻く環境の変化というのがあるかなと思っています。これは地域課題が学習課題になりにくくなっているところがあるかなと思っています。台東区の現状だけではないと思いますが、社会全体は趣味とか楽しみのための生涯学習は非常に人気があり活動をする方が多いけれども、地域課題ということになると、社会全体の雰囲気として自分事にならない、学習のテーマに上がってこないというような現実はあるのかなと思っています。

この辺りは、地域づくり、人づくりということ掲げている社会教育が本当の力を発揮するためにどうしたらいいのか、行政・社会教育の学習事業の中でも、その機運をどうやって高めていくかということが課題になっているかなと思っています。私からは以上です。

**渡邊**▶ 渡邊健一です。私は横浜生まれ、横浜育ちと言いたいところですが、相模原市に転居して18年目になりました。その前は、2年ほど茨城県つくば市に暮らしていました。今日は茨城の方もいらっしゃるの嬉しいです。

私の紹介は、大会冊子の14ページになりますが、私は全盲の当事者です。両親も全盲の視覚障がい者です。私は生まれつき強度の弱視でした。視力があつた時でも0.01とか、眼鏡をかけても0.02で大して変わらず、むしろ眼鏡をかけていた時の方が危険なことが多かったと思うほど、本当に全盲に近いような視力でした。

横浜市立神奈川小学校という弱視支援学級がある学校に通い、今でいうインクルーシブ教育を受けました。6年生まで通常学級で大半の活動をしまして、社会と理科の授業は支援級に行く通級指導型で学習支援を受けながら、電車やバスを乗り継いで卒業まで通いました。

その後、横浜市立盲学校に中高と6年間通いまして、18歳頃に、気づいたときにはもう全盲になっていました。

進路選択の時は、当時は大学なんてとんでもないという状況で、まずは手に職をつけ、視覚障がいだったらあん摩マッサージ、指圧師等の職ではないかと学校の先生や親には進学を一蹴され、何で大学に行きたいのかと厳しい指導を受けていた時代でした。最近は、子どもの権利条約等があり、選択できるような時代になりつつありますが、当時は厳しいところでした。

つくば市の国立の短大へ進学し、つくば市の方は本当に温かい方々でしたが、短大の先生たちはおっかない先生で、私は1年目で単位を落としてしまったのです。入学して半年もしない内に「お前はもう留年だ。」と。大学を一浪していた上に今度は一留だと？イチロー選手は一流！方や自分は？（一同笑い）いや、私は一体どうなっていくのだと。そこからの巻き返しですね。

私は中学の時に教員になりたい目標ができました。当時、盲学校に英語の全盲の先生がいて、自分も教員になりたいと思いました。教員になるには大学に行かないと免許が取れないので、通信教育なら、経済的にも親の負担も減らせるし、自分のペースで学べる大学の通信教育部だったら勉強できるかなということで、約10年かけて勉強を続けました。その過程で、社会教育に出会いました。社会教育

とか生涯学習というワード、領域があるのだな、ということに出会えたのが大きな人生の分かれ道だったと思います。

それで、社会教育の現状をどう捉えているかに対しては、地域の社会福祉協議会で活動している視覚障がい者向けの読書支援をやる音訳グループ「VOICE 神奈川」に入会して運営の応援に入ることになったことが関係します。例会が毎月2回あり、その例会でファシリテーター的な話し合いのお手伝いをして、その場がよりよい学び合いの場になるようなことを10年間続けまして、大体200回ぐらいの例会に参加して活動していました。

そんなところで「社会教育とは何ぞや」ということを考えるようになり、音訳者の方々と関わりの中でたくさん育てていただき今日があります。この読書関係のことは後程、特に図書館との御縁について、お話できればと思います。



**伊藤** 登壇者それぞれに社会教育の現状をどう捉えているのか、またここに来られるまでの社会教育との関わりについてお話してくださいました。

青木さんは「地域のおじさん」というところから、阪本さんは社会教育主事という立場から、渡邊さんは障がい当事者という立場、バックグラウンドに焦点を当ててお話をくださったかと思います。

改めてですが、今回のテーマが「すべて

のひとが学び続けられる」と表現された背景には、実際にはすべてのひとが、たやすく学び続けることができる社会環境にはなりえていないという現状認識があつてのことだと思えます。

(柱の第2として) 学び続けることが難しい状況にあるとか、学びの場にアクセスすることが難しいとか、そうした状況にある人々の支援はどういうところを構想すればよいでしょうか。

これまでの働きかけ等の経験や具体的なお話をお聞かせください。

**渡邊** 私の場合は、日々情報障がいに直面して生きているので、その障壁に対応するアプローチとして、対面朗読という支援を受けています。最近是对面音訳と言う場合もあります。これは、図書館の障がい者サービスの一つです。図書館や点字図書館の部屋を借りて、音訳者に目の代わりをしてもらいます。私の場合、通信教育の教科書だったり参考書だったり、専門書を中心に読んでいただいています。

初めてサービスを受けたのは、小学校4年生の時でした。夏休みの自由研究の宿題を図書館の職員の方に相談をして、「鉄道の歴史」として日本で初めて鉄道が走った場所を調べるのに、図書館の方から本を紹介してもらって、それを音訳者の方に読んでいただきました。それを未だに続けて約40年、今の生活にはなくてはならない活動、支援というか、ライフワークと言ってもいいかもしれない。

相模原市の図書館にも通いながら、支援を受けています。先ほど紹介した音訳グループの会の応援に入っていた時にも、会のメンバーにも対面朗読をしていただいていた。音訳グループ「VOICE 神奈川」には結成当初から10年ぐらいお世話になり、音訳ボランティアのメンバーの

相談、愚痴、悩みもいっぱい聞きました。たくさん交流しましたね。こういうところを工夫するといい録音図書ができますよということを私がアドバイスし、音訳者の方から、「渡邊さんを実験台にするからね」と言われるほどの深い関係性が築かれました。そうした経験を生かして、相模原市では10年前から市民団体へ入って活動しています。

最近では、図書館をはじめ、読書バリアフリーのための取組が行われてきていると思います。読書に困難がある人、図書館に来館するのが大変な人に向けて、どういう読書環境に整備していくか、よりよい図書館にしていくにはどうするかといったことが、令和元年にできた、いわゆる「読書バリアフリー法」に書かれています。その法律にある読書バリアフリー計画については都道府県ベースではだいたい策定する所が増えましたので、市町村でも、特に相模原市とか横浜市、川崎市等の政令市でも計画が作られるといいなと期待をしています。図書館がアップデートしていく必要があるのかなと思います。

私は障がいのある人同士のコミュニティーよりも、目の見える方々の団体での活動の方が多いのですが、先日も私が運営役員をしている「図書館と市民をつなぐ会・相模原」という、市に文化団体登録をしている団体と図書館が共催する「第16回図書館ひろば」を開催しました。

一般市民の方にバリアフリー図書を触ってもらうとか、桜美林大学のサークル「図書館サポーターズ」の皆さんとタグを組んで、触地図や「さわる絵本」を展覧して交流し、点字を書く体験、クイズ（スタンプラリー）など、ワークショップを御一緒しました。

3Dプリンターのブースも設け、協力していただいた鶴見大学の先生から、3D

プリンターで作成したフィギュアをいただきました。（実物を出しながら）これがインターコンチネンタルホテル。長い方がランドマークタワー。立体感があって、触るとこれだけ高さが違うのだなと実感しました。これは、私の自宅周辺の立体地図です。平らな場所が多く、私がかつて住んでいたところが5階建てで一番高いので、ここだけちょこんと高くなっていることが分かります。

今度、相模原市に中央図書館ができませんが、場所は淵野辺で、今私が人差し指で触っているところが今の市立図書館です。この隣の公園に5年後に建ちます。

3Dプリンターで印刷した地図から、高いビルと比較すると図書館は割と低いだとか、そういう立体感がわかるのは、新しい技術の発達で嬉しいなと思います。ユニバーサルデザインを目指して、「ドラえもん」が凹凸になって描かれた絵本なども触ってもらうことも、いろいろなところで続けています。

私からのメッセージは、視覚障がいの当事者ももちろんですが、いろいろな方にこういう方法があるとか、こんな技術が発展しているということも含めて、こうしたニーズを持っている人も生きていることを、いろいろな方に知っていただけるような学びの機会、より良く発展するといいなっていうようなことを一緒に共有できる場があるといいなと、そんな思いで活動しています。以上です。

ちなみに、これがドラえもんですね  
（実物を見せる）

**青木** 先ほど「地域のいろいろな組織で目的や理念を絶えず問いながら、継続した繋がりのある活動を楽しんでいます」と語りましたが、社会教育事業において、事業の目標や理念をよく理解せず

に、活動ありきの体制や仕組みだけが先行してしまい、多くの場合は「負担」という2文字に置き換わっていると、地域活動をしていて感じています。でも、その理念についてよく考えてみると、学び続ける環境というものが生まれる可能性がいっぱいあります。

今、全国的に学校運営協議会制度が進行しています。厚木市では現在、公立の小中学校36校すべてにおいて、学校運営協議会制度になっています。森の里小学校・中学校も学校運営協議会制度を導入し、モデル地区として、地域学校協働活動推進員が市内で最初に任命されました。

学校運営協議会と地域学校協働活動は一体的推進とよく言われますが、肝心の地域学校協働活動の理念が理解されていない場合があるのではないかと感じます。実は、ここに大きな学びが生まれる可能性があるのです。これは、子どもも大人も両方ともだと思えます。

協働とは、立場が異なる組織や団体、個人が同じ目的のために、その目標に向かって対等な立場で活動することを言います。ここでいう対等とは、お互いに当事者になるってということなのですね。そのためには、負担感がなくて、継続した活動ができる状況であることが、一番のポイントだと思います。そこで生まれたものが新しい価値観を生み、新しい視点で活動ができるのです。

地域学校協働活動は、学校にとって役立つものではないといけない。学校教育に役立つものということは、学校の授業や学校活動に関わっていないといけないということですね。そこで育った子どもたちが成長して、次の世代を担う人として育っていくことは、大きな地域づくりの第一歩です。そういう関係にあると思うのです。

地域学校協働活動で、地域の人たちの活動や経験を学校の授業の題材に使えば、地域そのものを知ることにもなり、あらゆる人たちの多様な価値観に接することができるような新たな学びが生まれるのではないかと私たちは考えています。

令和6年度は、小学校では71コマ分の授業ができました。この授業に関わって運営した人や地域講師の方の数は、年間にして350名を超えました。これらの活動によって、学校に通うすべての児童生徒とお付き合いができる、関わりができる、繋がりができる、地域の人にとってのすごい学びになるのではないかと考えております。

私は、皆さんもこれを真剣に考えてみるべきではないかと思えます。学び続けることが難しいという環境よりも、まずは目の前のものをこなしてみませんか。こなしてみるというか実行してみませんか。地域学校協働活動にはそれだけの魅力があると思っています。

そのためには、地域の努力も必要ですし、学校の努力も必要です。先生一人ひとりの努力が必要です。地域学校協働活動の魅力を感じない限り、先生方は動かないと思えます。先生方にとっても、活動は負担になるのです。

そうではなくて、地域学校協働活動がこれからの学校教育の新しい学びの1つだと自覚してもらえれば、先生方は動くと思うのです。また、地域にとっても新しい魅力の1つであると、将来の自治会を担う子どもたちを地域が育てるという認識に立てば、こんな地域づくりはないのではないかと僕は感じておりました。今、一生懸命、森の里小学校でやっています。

そういうことを長年ずっと続けていく

と、今年面白い話がありました。学校と地域が2年間かけて話し合っただけで地域の地区運動会と学校の運動会を合同にしたのですね。私たちの世帯では6500人ぐらい住んでいて、世帯数にして2700世帯ぐらいの地区です。その地区と学校の運動会を一緒にしたのですね。

もちろん合同開催にあたり、いろいろな苦悩や課題もありました。しかし、これはこれからまた始まるのだと思います。僕は「社会教育は終わって終わりじゃない」と思っているのです。終わりが次のスタートだと思っているので、来年の地区運動会はまだ面白い学校活動になるのではないかと思います。

その時の校長が、「多様な人に多様な評価をしていただける。こんなすばらしい学校教育はない」と言ったのです。それは、我々にとっても同じことが返ってくるのではないかと感じております。

「地域とともにある学校」とよく言われます。「開かれた学校」ではなく、もうそれは10年前20年前の話で、「地域とともにある学校」は「学校とともにある地域づくり」とイコールなのです。だから、我々地域側も学校側も一緒にともに学んでともに成長しましょうという考え方で歩み続けています。

そう考えれば、学び続けられる社会なんていろいろなところに転がっているのではないかなと思っているのです。皆さん、視点を少し変えてみましょう」と僕はここでお伝えしたいと思っております。「学び続けることが困難でも、実は目の前にいっぱいありますよ。」と言いたい。もっと困難な方がいらっしやるかもしれませんが、でも目の前のあることを皆でクリアしていきたいと思っております。

**伊藤** ▶ ありがとうございます。

渡邊さん、青木さんのお話にそれぞれに引っ張られますけれども、このお話を受けて阪本さん、第2の柱について、お話をお願いいたします。

**阪本** ▶ 青木さんからの力強いというか、学ぶ場は目の前にたくさん転がっているという、そういったお話もすごく興味深いなというふうに思いました。

私からは、学びの場にアクセスすることが難しい状況にある人々という視点から、在住外国人の存在を取り上げていきます。

現在、日本社会全体で外国人住民が増えているという状況は、皆さんも御存知のとおりだと思いますし、お住まいの町でも増えているところがあると思います。今、非常にホットな話題ですので、外国人住民の問題をどうするかという是非論については、この場で言及を避けたいと思います。

ただ、国籍は違えども住民になりますので、多くの自治体で住民の生活を支えるという意味で、外国人住民の学習のサポートについても市町村行政が主に担っているということが多分にあるのかなと思います。ただ、なかなかどのようにやっていくかということが見極められない。

それから、多くの在住外国人に対するサービスは、どちらかというとその自治体の人権担当課、台東区で言えば人権・多様性推進課が日本語の教育や様々な交流事業を行っています。ただ、なかなか理解が進んでいかないということも現状としてあるのかなと思います。

そんな中、私たち台東区教育委員会の生涯学習課では、多文化共生を考える学習に、ここ数年、取り組んでいます。もちろん在住外国人の方が各種の講座とかイベントに参加できるように情報提供する

ということも大事ですが、講座のチラシ等が外国語表記になっているとか、やさしい日本語になっているとか、そういうことだけではなかなか問題が解消されません。

いかに在住外国人の人と共生していくのかという学びが必要だということで、生涯学習課は多文化共生を生かせる地域づくりとかコミュニティーとかリテラシー等に、この3年取り組んできました。

初年度には、外国人だけをセグメントしてその学びを提供するだけではなく、一緒に学ぶ、ともに学ぶという時間を作り出すことが必要だろうということで、多文化を生かせる地域づくりに取り組みました。

ある町内会の区域で在住外国人の人たちを交えて、地域を一緒に歩きながら防災について学ぶという仕掛けをしました。その地域は、どちらかというところですが、「一緒に防災のまちづくりをするということで、初めて日本人と一緒に活動ができた」、「やっと地域に入れた気がする」というコメントをくださいました。20年以上近く台東区で暮らしていても、なかなか日本のコミュニティーにアクセスすることができなかったけれど、これをきっかけに一緒に参加することができるようになったという方でした。

その地域では行事が終わると大体、豚汁を作ってみんなで食べるということが習慣でありましたが、今では豚汁の他にチャイが出てくるということで、そういう地域の多文化化が進んでいるという報告があります。

このように、外国人だけを取り出してセグメントして何か学習の機会を作るといふことよりも、むしろ一緒にやっていくということの方が今トレンドで、すご

く大事だなと思っています。そのため、今お話しした多文化共生の学習の中で、多文化共生のための市民リテラシーを掲げてやってみました。

一緒に何かをやっていく時には、読み書き、そろばんといったリテラシーが求められます。先ほどの基調講演でも、見えないバリアがあるというお話がありましたが、入っていこうと思ってもバリアによって入れないことがある。だとすれば、日本人住民側にも、外国人住民とどうやって一緒にやっていくかということを知る環境が必要なのではないかと。支援とかサポーターを養成することよりも、一緒に学ぶ環境をいかに作るかということが大事なのではないかということで、こんな取組も始めているところです。



**伊藤** ▶ ありがとうございます。学び続けることが難しい状況にある人々へのアプローチについてお話いただきました。

そういう人たちをカテゴライズして、そこに働きかけるという発想だけでは限界があると思わされるようなお話もあったと受けとめています。

学び続けることが難しい状況にある人々がいるとしたら、その周囲にいる人たち、つまり難しい状況を作り出している側にも学ぶ場が必要で、つまりはすべてのひとと一緒に学ぶ場を考えていく方が、大切に楽しくて現実的なのかもしれ

ません。この辺りのことを、(柱の第3として)さらにお話伺えますか。

阪本さん、続けてお願いします。

**阪本**▶ 社会教育主事として私が悩んだ時に、頼りにしているのが社会教育委員です。町のことを本当によく御存知で、こういうことがあったらこんなふうには社会・地域が変わるということを知っているため、非常に心強いパートナーだと思っています。

先ほど見えないバリアという話を出しましたが、在住外国人に対しても見えないバリアがありました。映しているスライドの右側の可愛らしい女性ですが、キーパーソンとなる社会教育委員の方です。この方は、日本語教師、多文化共生コーディネーターをして、台東区に長く住んでいる方ですが、地域の問題に非常に敏感に気づいてくださいます。

例えば、今は支援やサポート等という時代ではなくて、一緒に学びを作っていくことや繋いでいく、理解者を増やしていくことが必要ということに気づかせてくださいました。他に、アクションを起こす人の連携を作っていくことが大事だ、ともありました。このキーパーソンとなる社会教育委員の方がいらっしゃることで、私たちはタグを組みながら、学びの世界を広げられています。

実際、やさしい日本語で学ぶ地域防災学習会は、外国人だけを集めて防災のことについてレクチャーするというのではなくて、一緒にどうやってこの防災について学ぶか、やさしい日本語を使っていくか等について検討しました。

また、多くの日本人の方が、外国人の話す日本語に慣れていないというところがあるため、外国人の話す独特な日本語に耳を慣らして、リテラシーをつけていく

という学びをしているというところもあります。

立場は違うけれども、こういった同じ情熱をもって、繋がって活動していただける社会教育委員の皆さんは、本当に頼りになります。この社会教育委員の皆さんの活動がとても重要なものだと社会教育主事としては感じております。

**渡邊**▶ 青木さんが地域学校協働活動のことを、現場の目線で教えていただきましたが、この活動の制度ができる前、2,000年ぐらいですか、小中学校で「総合的な学習の時間」が試行的に始まった頃から、私にゲスト講師の依頼が来るようになりました。

26年前のある日、実家の同じ棟に住む小学4年生の児童さんたちが、うちの実家を直接訪ねてこられて、私たち家族に講師を依頼されたことは思い出深いですね。バリアフリーについての勉強をしているクラスでしたが、全盲の私たちに「当事者の渡邊さんに実際にお話を聞いてみたい」というのです。それを働きかけるような担任の先生がおられたこともわかりました。なんと私の実家での課外授業となりました。課外授業当日、母と子どもたちが横断歩道の周りを一緒に歩いた時に、点字ブロックが横断歩道の片側にしか付けられていないことを児童たちは発見します。そのことを学校に戻った児童たちは「よし！市役所へ行って、渡邊さんのうちの前の横断歩道に点字ブロックを付けてもらえるよう依頼してみよう」ということになったそうです。そして彼らが行動を起こします。その半年後くらいでしたか？まさかと思いましたが、片側にしかなかった点字ブロックが両側に敷設されていたのです！今も、あのサプライズは語り草です。あの日から私の福祉教育

活動が始まりました。あの小学校の先生や子どもたちのように、頑張ってもらしゃる先生方や子どもたちを応援したいなっていう気持ちから、ずっと続けています。

以前に、私が通った小学校の担任だった先生が校長になられて、講師と呼ばれました。それから、校長先生を通じて「〇〇小学校へ行って欲しい」と他の学校を御紹介いただいたこともありました。

学校からのオファーは、直接知人の先生からいただくこともあれば、相模原市社協の「みんないいひと体験講座」といった市教育委員会と連携した「推進事業」の窓口を通じての依頼の両方があります。公民館とか生涯学習センターという社会教育関連の講座は、なかなかなかったですが、8年前には複数の依頼がありました。相模原市の公民館からオファーがありまして、ちょうどその年が点字ブロック50周年だったので、記念して何か一緒に考える、話し合う講座ができないかという相談に応じ、講師役をお引き受けしました。

点字ブロックは、日本人が発明考案したもののですね。岡山県の方が考案したのですけど。講座では、音響式信号機のこともお話しました。音響式の「ピヨピヨ」とか「カッコー」とか、今日も関内駅の北口から降りてこられた方はお気づきだったかな。「ピヨ、ピヨピヨ」という風に交互に1回に鳴って、もう反対側では2回鳴ってという信号を渡ってこられたと思うのですけど。

このように街中にいろいろな音サインがいっぱいあります。その音サインを題材にすると結構学びになるのですね、私も学びになりました。女性学級の講座を受けた方が、「素晴らしいね、もっとこの音響信号機の意味を伝えていくべきよ」

と言ってくださり、その言葉に私は背中を押されました。

今年、大和市のシリウスというところで、社会教育士の称号をお持ちのスタッフの方からぜひ講座をやって欲しいとお声掛けいただきました。

どういうタイトルがいいか一緒に考えました。担当者やセンター長の思いとしては、「シリウスは大きな複合施設だが、バリアフリーではない部分が結構ある。それを逆に学びにしたい」とのことでした。「シリウスという場を使って、参加者に思い切りいろいろ発見してもらって、気づいてもらって、それを一緒にシェアするというワークショップのようにしていただくことは可能ですか？」と。

これはありがたいなと思ひまして、私は小中学生向けに学校の授業用の「指導案」を作って持っていますので、それをスタッフにお見せし、市民講座用にアレンジし、「聞いて触って幸せさがし〜シリウス発！当事者と創るバリアフリーデザイン」と題してさせていただきました。

2時間のワークショップ込みの講座づくりを一緒にさせていただきましたが、先ほど栗栖さんが講演でおっしゃっていた障がいのある当事者が最後の方に出てくるような、お膳立てするようなものではなくて、一緒にデザインして、参加してくださった皆さんは今日からバリアフリーデザイナーですよと呼びかけるようにすることで、皆さんはもう我が事のように楽しんで講座に参加してくださいました。第2弾のリクエストをいただいているところですので、何とか頑張らなきゃなと思っています。

**青木**▶ 時間が迫ってきているので、簡単に。

私はいろいろな活動をする上で、徹底

していることがあります。実践して、実践して、研修して、たまに発表する、そして実践する。このスパイラルです。これをいつも自分の仲間たちと一緒にやっています。そうすることによって、自ずと他人と共有した価値観がもてるようになります。それを繰り返すことによって、いろいろな人の多様な価値観を自分事のように、自分のもののように取り入れられるのです。

ある先生が、社会教育とは繋がりを学ぶ教育であると言いました。それを聞いたとき、やはり繋がりを作るっていうことは自分事にしていかないといけないのだなって思いました。

阪本さんにしても渡邊さんにしても、いろいろな立場の方のお話が出てきました。これをいざ理解しろと言ったって、なかなかすぐには理解できないですよ。これを日々、僕はいろいろな立場の方と一緒に接し、繋がりをもつことで自分事にしていきます。そうすれば、差別というものはないのではないのでしょうか。どんな方でも学び続けられる環境ができるのではないかと思っています。

今、地域学校協働活動をやっていますが、やってみて先生の立場がよく理解できるようになってきました。学校に入ってみて初めて、先生の大変さがわかったし、逆に先生方もこの地域はこうなのだねという地域の理解も深まりました。お互いにそういう環境を自然に作っていくということが、やっぱり社会教育の大切なところではないかと思っております。

**伊藤** ▶ ありがとうございます。これまで、「すべてのひとが学び続けられる社会をつくるために社会教育ができること」という壮大なテーマについて、「学び続けることが難しい状況にある人々へのアプロ

ーチ」と「難しい状況にある人々をとりまく周囲の人々へのアプローチ」という2つの観点からお話ししていただきました。この2つの観点を切り離して話すことは難しいところではあるのですが、あえて意識して2つの観点からお話をいただいたところです。

少々長くなりましたので、5分ほど休憩時間を取りたいと思います。そのあと質疑応答の時間を少し取らせてください。

—小休止—

**渡邊** ▶ 補足です。先ほど、皆さんに呼びかけた際に「拍手で応答」していただきましたが、この拍手ワークは私が提案しました。そうしたら「楽しそうだねえ！やりましょう」ということになりました。先ほどお話した学校などでの講座でもよく行っております。既にお気づきだった方もいらっしゃると思いますが、私は全盲なので、黙って手を挙げてもらっただけでは何人くらいかわからない。でも、例えば「眼鏡をかけている人はいますか？」と呼びかけたら、「あら、けっこう散らばって座っているんですね」とか私もリアクションを返せます。

先ほどの阪本さんからの問いかけでも「社会教育主事の方、けっこういらっしゃる！数十分かなあ？いやもっとかなあ」などと想像できて、情報として伝わるわけですね。

御協力ありがとうございます。

**伊藤** ▶ では、再開します。16時になったら登壇者の方に話を締めたいと思っていますので、それまでは質疑応答の時間とします。

どうでしょうか登壇者の3名の方や、もしくはどなたかに質問したい方は、ぜ

ひ挙手をお願いします。

**質問** 渡邊さんにお伺いします。

私は3月まで公民館の職員をやっております。公民館に何とか来ていただけないかと、いろいろなことをやってきたのですが、視覚障がいがある方に来ていただくのはすごく大変でした。

何回かイベントをやって来ていただいたこともあるのですが、今日のテーマにもなっているアクセシビリティというのがあり、視覚障がいがある方々をお呼びするのってすごく大変なことなのです。ライトセンターにも行ってお話を伺ったこともあるのですが、やっぱり視覚に障がいがある方は、家から外に出て、例えば公共交通機関を利用して公民館に来るということはすごく大変なことじゃないかなと思っていて、アクセシビリティの改善ということで、私たちが何かできることがないのだろうかというのが第1の質問です。

もう1つは、見える人と一緒に学ぶときに、合理的な配慮として、こんなものがあると良いみたいなものがあったら教えていただきたいと思います。特に聴覚障がいだと手話通訳さんをつけるとか、要約筆記をつけるとか、そういうことがあると思いますが、視覚障がいの場合には、こういう配慮があると嬉しいというようなものがあったら教えていただきたいです。

**渡邊** 「視覚障がい」といっても様々ありまして、弱視、ロービジョンと言われる少し視力はあるという方。それから、全盲といっても生まれつき全盲の場合と、私のように小学生の頃にほぼ全盲に近かった場合など、若干の違いはあります。あと中途失明ですね。私の父はもともと高校

野球の選手だったのですが、ファールボールを胸に当ててしまい野球ができなくなり、その後に難病になったということで、20歳で見えなくなりました。

視覚障がい者にもそれぞれライフステージがあるため、なかなか一律に「視覚障がい者に必要な配慮はこれですよ」とは言いづらいのですが、約30年の経験から自信を持っていえるポイントが一つだけあります。それが、今日の「聞いて触って幸せさがし」です。さっきスライドに出ていたワードです。「聞いて触って」。これをキーワードにすると、何か見えてくるような気がします。というのも、世の中は視覚優位ですよ。目が見えることが前提になっていたりするので、聞くことと触ることで情報提供ができる可能性がいっぱいあると思います。

**質問** 青木さんに質問ですが、地域学校協働活動にあたって、学校に入って、何コマも講師を迎えて授業をしていたとおっしゃっていたと思うのですが、具体的にはどんなことをしてきたのか教えていただきたいです。

**青木** 栃木県も地域学校協働活動が有名なところですね。各学校に地域協働推進専門の先生が赴任されているということ、よく知っています。我々も、その専門の担当の先生がいらっしゃるのですが、活動(例えば授業支援)にあたる題材は先生方が見つけないといけないのです。第一、授業は先生がやるのですから。

学校活動も先生や学校側が決めるので、先生がいろいろな提案をして、「こんなことを学びたいのだけど…」ということをどんどん言ってもらおう。言ってもらおうためには、やはり先生とツーカーの仲にならないといけません。そのためには

時間がかかります。

でも私たちは、実は16年前からそういう事業を、ずっと栃木県のある方と一緒にやっていたことや、その関係もあってうまくできました。

実は昨日も防災や消防の話で授業をやってきたところですが、先生方が一生懸命、教科書で消防とか警察のことを教えていて、消防団ってどんな団体か、そして地域防災、自主防災ってどんな団体かという話になったときに、我々が入って「では、消防団を呼びましょう」「自主防災隊は自治会ですよ、自治会の役員さんと呼んでこよう」と呼びかけたところ、山のように参加者が集まってくれました。そうして、実際のお話をしてもらったりすると、教科書には載っていないことが山のように出てくる。

多様な価値観ですよ。多様な要素から学びが生まれてきます。それが非常に魅力だと僕は感じます。だから、僕らが授業を提案することもあるし、先生方から提案されることもある。それを一つひとつ精査しながら、いわゆる学校教育に役立つもの、それと同時に地域活動、地域づくりに役立つこと、この2つがマッチしたとき、ともにWin-Winになるのではないかと思います。

だから、先ほどお伝えした71コマの授業の一覧表について、今、厚木市内のいろいろな学校に講習に行っているのですが、やっぱりその地域、その学校の特徴を捉えないといけないし、他の学校と同じことをやれなんていうことはなかなかできない。だから、栃木県なら栃木県のいろいろな特色があると思いますので、その特色をよく捉えて、それを授業として役立てる。授業の題材に使う。そうすると子どもたちにとって、いろいろな新たな学びが生まれるのではないかなと思っていま

す。

**質問** 阪本さんに聞きたいなと思って  
いることがあります。地域学校協働活動とかいろいろなところに参加してられる方って、やっぱり地域課題とか感じて参加したり、集まったりしていると思いますが、どうも地域で参加される方が限られているというか、同じメンバーが出てくるように感じます。

私は子育て関係で活動しているのですが、やっぱり同じメンバーが出てきています。結局そこが仲良しグループみたいになっている部分もあるのですが、子育て世代の方は忙しかったり、団塊の世代の方も、地域と馴染むというかフラットな関係が築きにくい部分もあり、「地域活動にはどうも行きたくないな」「地域って何か巻き込まれるから嫌だな」等の声も聞こえてきていて、このままだと、どんどん地域団体が痩せ細っていくのではないかと思います。

その学び続けることのモチベーションについて、先ほど阪本さんは「地域課題は学びの素材になりにくい」、「『自分事』化しにくい」とおっしゃっていました。そこをどうやって乗り越えたらいいのかを皆さんに、まずは阪本さんに伺いたいなと思って質問しました。

**阪本** 実はその話題について、先ほど4人で話していたところでした。

私の感覚としては、今の大人たちは、自分のやりたい趣味や好きなことには邁進しても、地域にある課題に対して積極的に解決のために一歩踏み出そうってところは非常に弱いのではないかと思います。もしかしたら、この問題は台東区に限らずあるのかもしれない。でも、それをどのようにしたらいいのかを青木さん

や渡邊さん、伊藤先生たちと話していました。

それぞれの人たちに、やりたいことがあるということは大事なことになるので、いろいろなことを上手に地域の中で生かしていくようなコーディネートが必要なのではないかと思えます。

話のなかでは、無理に「この課題をあなたが解決してください」とやるよりも、「あなたがやりたい、そしてあなたが得意なこと何ですか」ということを地域の中にマッチングさせていくような仕掛けが必要なんじゃないかという意見が出ていました。

私自身も本当にその通りだなと思いましたし、社会教育主事の立場としてもそうだなと思いました。また、地域の中で活動する人たちが偏ってきて、仲良しグループがあることが排他性を生んでいるかもしれないと、私も感じる場所があります。

ただ、ちょっと地域活動に参加してみたいなという方はたくさんいらっしゃって、でもなかなか課題に対して自分が活動の仕方を合わせていくことが難しいので、私たちや社会教育委員が、その方の持っている良さやポテンシャルを地域の中にどうやって組み替えていくかといったつなぎ役をしていくことは、とても必要なことだなと行政職員としても感じているところです。

青木さんも是非一言回答をお願いします。

**青木** ▶ 本当に楽屋で話していた話題ですね。難しいことなのですが、ちょっときっかけさえつくれば、いとも簡単です。きっかけというのは、その人が入りやすい場所を、居場所を作ってあげることですね。ここにいらっしゃる社会教育委員達

が、そのきっかけを作るリーダーの役割だと僕は思っています。

「地域に役立つよ。やりがいがあるよ」と地域活動に勧誘したら、人がどっと入ってきますね。皆さんが社会教育委員として、地域やボランティアの人とか、いろんな活躍する人たちの場面を作ってあげること、地域の人々のやりがいを生むことがとても大切ではないかと思っています。そうすると地域の人々は一気に入ってきます。僕のところでも去年71コマの授業をやっています。今年は多分90コマぐらいになると思います。

このように活動が活発になったのは、先生方が魅力を感じ始めたから、地域の人々が魅力を感じ始めたから、それぞれの先生の立ち位置ができ始めたから、地域のそれぞれの人たちの立ち位置が出てきたからですね。だから、どんどんアイデアが出てきます。こういう場面を作るのが我々社会教育の役目ではないかと僕は思っています。

渡邊さんはいかがでしょう。

**渡邊** ▶ 私は、公募委員の社会教育委員なので、まだ経験が浅いのですが、市の審議会等の委員を務めるのは社会教育委員で4回目です。最初は図書館協議会委員、そのあと首長部局の総合計画審議会、経営評価委員を経験し、「読書バリアフリーセンター」と言えるような中央図書館を設置することや旧図書館跡地の活用方法、地域学校協働活動、社会教育士などに関わる提案をしてきました。

先ほどの3Dの地図を御紹介した際に少し話しましたが、図書館協議会委員のときに、まちづくり関連の大きな計画案が出されました。今度、図書館がすぐ隣の公園の中に新しく建つのですが、8年ぐらい前に大反対が起きました。公園の景

色も状況も、指一本変えて欲しくないって人たちがたくさんいて、そういう方たちが、内外に意見を出したのです。

ということは、地域のことに関心ではないのではないかな…と思いました。何かのきっかけで、必ず接点が生まれる市民もいるはずです。

そこで、私はその8年前、図書館協議会委員の会議で発言しました。市の方から今度新しい図書館を公園の中につくり、公民館や児童館・青少年学習センター・国際交流などの6つ7つの公共施設を複合して作る計画であるとのことでした。資料を見せていただくと、「その他」の欄に、協議会等って書いてあって、「あれ、おかしいな。なぜ協議会等がその他の方に入っているのだろう」と思って質問しました。「この資料に『協議会等』と書いてあるのですが、市の方で方針があるのですか」と尋ねたところ、「今のところ、まだそういう協議の方針は考えていない」と言われました。

そこで「私も協力しますので、ぜひ住民の皆さんや利用者の意見を聞いてみませんか」と伝え、後日のパブリックコメントにも案を提出しました。その結果、関係者それから住民、いろいろな団体の代表の方等で作る「まちづくり市民検討会」が作られました。新しい複合施設を検討協議する場が作られたのです。こうして、ここ10年余り、たくさんの提案をした中には、実現したこともたくさんあります。そういう経緯もありまして、手を挙げて意見を言って良かったなと今では思っています。

なので、私の場合は社会教育委員としてではなかったのですが、いろいろな皆さんの立場でアクションを起こされると、何か開けていく、開拓していけるのではないかなと期待しています。

**質問**▶ 青木先生にお伺いしたいです。71コマの授業を提案されているということですが、秦野市は神奈川県では唯一の盆地ということもあり、いろいろな特徴があることから、学校の先生方の教育研究会が行われています。

その中で今、秦野市はふるさと教育を一生懸命やっているため、それを主体に地域教育をやったらどうかということ提言したところ、ある先生から「言っていることは素晴らしいが、やっぱり文科省から来ている学校教育が優先になってくる。特に中学校は受験とかあって、その中でそういう一貫したふるさと教育はなかなか難しい」と言われました。

そのような場合、青木先生はどのように対処されるのかをお伺いしたいと思います。

**青木**▶ 学校はその通りですね。年間計画が決まっています。皆さんは「学校教育計画書」を見たことがありますか。学校には必ずあります。その中に各学年で何をやるかっていうことが書かれています。それが1年前に決まるのです。そこに入れてあげないとだめなのです。

学校の稼働日数というのは200日ぐらいで、授業数を増やすことはできない訳ですから、その中に入れないといけない。授業数も決められている。でも、増やすと先生方が大変になっちゃうではなくて、今ある教育の中の学びを、少し視点を変えてみるということが大切なのではないのでしょうか。

例えば、ふるさとづくりをするのであれば、総合学習と一緒にやってみませんかと提案します。総合学習だったらいろいろな視点で捉えられるからです。それも学年ごとの提案ではなく、例えば僕だったら、小学校だと1年生から6年生ま

でトータルして、その一つのテーマを追いかけていきたいと思います。具体的には各学年で「地域」という共通テーマで、3年生はまち並みや地域を知ろう、4年生は地域福祉を学ぼう、5年生は地域防災を考えよう、6年生は自分の地域がどうやってまちづくりをしていったかの歴史を学ぼう、などと提案します。このようにトータル的にできるようになっていきます。

活動について、先生と一緒に話す場が学校運営協議会です。地域の人が出て、我々のふるさとを作るのだったら、みんなで真剣に考えましょうと呼びかけるのです。その段階まで行って初めて、学校運営協議会が成り立つのです。学校から報告だけ受けるのが学校運営協議会ではありません。やっぱりみんなで一緒にこの地域の子どもたちをどう育てていけば、その地域の担い手になるかということを考えて、先生方と一緒に、学校と一緒に、校長と一緒に、教頭と一緒に考えていく。そうすると必ず答えが出てくると思います。

答えが出るには数年かかるかもしれませんが、その熱意は絶対学校に伝わると思っていますので、ぜひ頑張ってください。

もし、そういったテーマを教育委員会が持っているのだったら、それは最大の武器じゃないですか。頑張らしましょう。

**実行委員長** ▶ 大会の実行委員長として、シンポジウムがここまでまとまって素晴らしいと思う一方、キラキラして素晴らしいすぎるように感じてしまいました。

私みたいな下世話な人間からすると、多様な背景を持つ人たちが、繋がるとか学びというところにアクセスしにくい人たちを、学びにつなげるための社会教育委員の仕事において何が大事なのか、教

科書に書いてくださっていいような話が出てきたと思います。

ただ、今回も神奈川大会をみんなで、社会教育委員が神奈川県一丸となってやらなきゃいけないと努力して、普段全然知らない人、会ったことがない人たちと私たちが、ここまで一緒にこの大会を盛り上げることができました。この「繋がりをつなぐ」ためにどのような工夫をしたかについてですが、一つは会議において理念ってというのが絶対必要で、目指すべき目標はここだっていうことをみんなで共有すること。

あともう1つは、「コロナが終わったので、そろそろ一杯やりますか」と私が会議の終わった後に呼びかけたところ、みんなが「うおー」と応えたこと。

そこから本当に人間と人間の繋がりが、社会教育の繋がりが深まったように感じます。会議後の飲み会等については、昭和の時代の話と否定されている部分もあると思いますが、新しい方たちと一緒に何かやらなきゃいけないときに、本音で繋がっていくための仕掛けや、どういうことが本音で語り合える関係づくりに繋がるかについて、本音の部分を最後にお聞かせいただきたいなと思います。

**青木** ▶ 僕は実際に活動しながら、どういう意図で活動しているかについて振り返る研修をして、また実践して、たまに発表するというのをやってきたのですが、それを繰り返していくうちに、関係者間で共通項が出てきます。その共通項を持って繋がりをつくっていくことをしていました。

地域学校協働活動や学校運営協議会に入り、教育のことに携わる中で「これからの教育はジグソーパズルではない。レゴブロックだ。多様な価値観があるのだ」と

いうことを学びました。

それを踏まえると、やっぱり根気よく繋がっていくことがそれぞれの立場のことを理解する大きな第一歩であると思いますし、実際そのように活動しています。

**阪本**▶ 最後に本当に難しい質問をいただいたなと思うのですが、先ほどの御質問にもあった活動をしていく中で人と繋がるのは、非常に難しくなっているのですが、地域活動に目覚めてくると、ややもすれば他の所管からはクレーマーだと思われるぐらい情熱が出てくる方も、中にはいらっしゃるなと思います。

やっぱりそれを「かわいい」というと、ちょっと語弊があるかもしれないですけど、かわいいと思って一緒に付き合おうとする感覚がお互いに出てくると、本当に芯のところで繋がれるなど、社会教育を長くやっていて非常に思います。「うわっ」と耳が痛いことも言ってくださったり、お互いに言い合ったりするかもしれないけど、それを「何かかわいい」と思えるような付き合い方をしていくと本当に芯で繋がるなどそんな感じがしています。

**渡邊**▶ 三井為友先生は「月間社会教育」の初代編集長をされた先生で、都立大学の名誉教授などをやられた方です。三井先生が言われていたのは、戦後間もない頃は、話し合い学習等の「共同学習」が重視されていて、小集団のグループが重んじられた時期があり、それを現代の社会教育も引き継いでいるのかなと思います。

私もどちらかというと、学校の30人40人クラスのような大人数の集団より、10人前後もしくは円卓等の顔の見える環境の方が話しやすいと思いますが、皆さんがインクルーシブな思いで受けとめ合えるような関係性が築けていれば、どうい

う場でも良いのではないかなとも思っています。

なので、何か大きな仕掛けを行うというよりも、やっていく中で、ケアすべきことを見つけていくのが良いかなと思います。一步踏み出すことは、私はすごく苦手な方です。皆さんは信じられないかもしれませんが、私はかつて場面緘黙症でした。1時間ぐらいしゃべれなくなってしまって、「はい、渡邊君しゃべって。感想一言どうぞ」と言われても、次の言葉が出てこないという学校生活を送っていました。

今日、約700人の方がいらっしゃっていて、皆さん一人ひとりの人生の中にもたくさんの背景があると思います。そういう背景をお互いが受けとめ合うというか、大事にし合うコミュニティーの中でいろいろな立場で、できることをやっていくことが、一番シンプルですが大事なのかなと思います。それが、結果的に話し合い学習から入っていく場合もありますし、いろいろなケースがあるような気がします。

**伊藤**▶ 最後の第4の柱として、「すべてのひとが学び続けられる社会をつくる」のはいったい誰なのか、をお話いただくにあたり、そういえば、社会教育委員の職務について確認をしようかと話していましたね。

社会教育委員の職務というものがありますが、実はそういったものを日頃きちんと見直したり、読み直したり、そこに照らして自分の役割やしていることを考え直すという時間はないのではないかなということで、この大会冊子の13ページに記載しました。社会教育法第17条です。

この社会教育法第17条の職務について、今日、全国社会教育委員連合の鈴木会長

からこれはどうなのかなという話もありましたが、「諸計画を立案すること」や「諮問に応じて意見を述べること」「そのために調査研究を行うこと」といった職務が規定されています。これらを御覧になって確かにその通りしているなどか、うちの自治体内の会議では機能しているなど言える方はどのぐらいなのかな、ということ会場を皆さんにお尋ねしてから、登壇者それぞれ最後にお話をいただければと思います。

ちょっと拍手で教えてください。皆さんの自治体では、社会教育委員は規定の職務について行えていますか。(拍手が起こる)ありがとうございます。では、登壇者の皆さん、お一人2分ずつくらいしかないのですが、お願いいたします。

**青木** これは皆さんに、ぜひやってもらいたいなと思っています。今日の基本理念、僕ではなく全体の理念で、学び続ける社会を作るということですね。この学び続ける社会を作るために、社会教育委員としては、やはり仕掛けを作ってもらいたい。社会教育関係者にはぜひ、社会に根差した仕掛け人になってもらいたいと思っています。もしそれができなければ、その地域に根差した仕掛け人となる人を育てていってもらいたいと思っています。

その仕掛けとは何か、もう単純です。その理念を実現するための施策を作ることです。施策を教育委員会に提言すること。多分答申にはならないと思います。提言でも十分だと思いますね。「教育委員会を挙げて事業をやりましょうよ」と、施策を作っていくことが、私は大切ではないかと思っています。施策ができて終わりではなく、施策を基に実際に活動して、成果を検証し、次なる施策をまた作っていく。これがやはり社会教育として、社会教育

委員に必要なことではないかなと思います。

私も社会教育委員をやって、事務局が出してくる書類に判を押すだけではだめだなとつくづく思いました。自分たちの社会教育委員としてのスキル、いろいろな経験値、そういったものを全て結集して、新しいまちづくり・地域づくりをするための施策をつくるのが大切ではないかなと思っています。ぜひ皆さんにも頑張ってもらいたいです。

**阪本** 私も先ほど申し上げた通り、社会教育委員の方々が地域の中において、地域の中の課題を掘り起こし、そして、こういうことが大事だよというふうに提言をしてくださる、この存在がとても大事だなと思っています。

そして、先ほど私が申し上げたように、社会課題を課題として捉えた住民の人たちがアクションを起こすと、ややもするとクレイマーのようになってしまうこともあります。他の所管課から見れば、「あの人、急にこう活動始めたよ」と住民の方がクレイマー的に見られてもしまうこともあるかもしれませんが、社会教育委員には、そんな方と行政とのつなぎ役にもぜひなってもらいたいです。

つなぎ役になっていただければ、私たちのような社会教育主事とも繋がって、一緒に伴走しながら、いろいろな地域課題に取り組んでいただければいいかなと思っています。

**渡邊** 私からのメッセージになるかわかりませんが、フロンティアスピリット、開拓者精神。これが社会教育委員にぴったりかなと思っています。

冒頭にお話したように、私自身も両親とも重度の障がいがあり、同じような障が

い当事者だったということもあり、一般の家族のように、なかなか身近に助けを求める、本当の意味で助けを求められる家庭環境ではありませんでした。もちろん両親は、「したくてもしてやれない」もどかしさ苦悩を抱きながら、対面朗読をはじめ外部に支援を得つつ、私を育ててくれました。そのような背景がある方々はまだまだたくさん潜在していると思います。私もそうだったから言うわけじゃないですが、そのような背景は、なかなか見えにくいです。

でも、この30年を考えてみたら、私は随分社会教育に救われた人生だったと思っています。このように、たくさんの方の前でお話させていただく機会を得られたこともそうですし、横浜市や相模原市の皆さんが私を送り出してくださったことにも本当に感謝です。

私は、今日までどちらかというと学校生活は不遇で、社会的障壁と常に向き合わなくてはならない苦悩の連続でした。そんななか、何かしらの社会教育的なアプローチを受け、学校教育一辺倒にならないでよかったなと思います。

これは就労や仕事についてもそうですね。今、いろいろな働き方が問われています。常勤が良い場合もあれば、非常勤の方が自分にとって働きやすいついていう場合もあるでしょうし、その逆で、もっと正規職員で頑張りたいという人もいます。それは障がいのある人たちも同じで、私自身今思えば、こういう社会活動の方が自分の体力には合っていたのかもしれないと思えるようになりました。

皆さんの地域にも、言葉には出せなくても、社会教育で救われている方が必ずいますので、今後そういう方々のことを思い浮かべながら活動していただくと嬉しいなと思います。

**伊藤** 今日、もう何回言ったか分かりませんが、「すべてのひとが学び続けられる社会をつくるために社会教育ができること」という本日のテーマは、2時間で扱うにはとても難しいテーマであったと思います。

特に綺麗な落としどころも結局ないのですが。キラキラした言葉・理想・理念は共有できて、キラキラした正解はつかめるのですが、本音で実際どうなのか、という自分なりの正解を掴むにはなかなか時間も足りませんし、正解はないのかもしれないです。ですが、そういったモヤモヤしたところも含めて、それぞれの経験とか考えをお持ちの社会教育委員の皆さんが、一つのテーマについて一緒に考えるっていうことの意味は大きいだろうなと思います。それが、こうした大会が開かれることの大きな意味だと思うのですね。

そんな時間を、御一緒させていただいたことを心から感謝しています。長時間にわたりましたけれども、進行に御協力賜りましてどうもありがとうございました。

青木さん、阪本さん、渡邊さん。それぞれのお話、言葉を通して、皆さんそれぞれに受けとめられたところがあったかと思っています。これで閉会といたします。ありがとうございました。

